城陽の生き物ガイドブック

植物編

2019

知ってる？

城陽の宝もの

～次代に残そうふるさとの自然～

ーはじめにー

野草の写真を撮っていると、時々「それ何の花ですか」と聞かれることがあります。名前を教えて、最近はこんな外来種が増えていますなどと一言説明すると、「ありがとう」と喜んでもらえます。名前がわかると、今はスマホなどで検索すると膨大な情報が入ってきます。でも、よく見るけどなんだろう…で終わってしまう人がたくさんいるようです。そうした方々が絵合わせならぬ、写真合わせができるガイドブックがあったら良いのにとの思いでこの冊子を作ってみました。

植物…とりわけ道端の野草は地域の自然環境を映し出す鏡です。園芸種として、法面の緑化として、家畜の飼料として入ってきた植物やその種は、特定外来生物などという難しい言葉で表現せずとも、地域の自然の移り変わりを私たちに感じさせてくれるものさしです。

このリーフレットで掲載している野草は道端や公園や田畑でよく見かける植物ばかりを取り上げています。近くを散策するときに一緒に持ち歩いて使ってみてください。

城陽環境パートナーシップ会議

春 ~Spring~

アメリカフウロ　フウロソウ科

キクのような葉に赤っぽい長い茎。薄紫の小さな５弁花をつける。果実の先端には、先端が５つに分かれた花柱が残っている。

イヌガラシ　アブラナ科

高さ 10～50 ㎝の多年草。花は黄色で直径４～５㎜。果実は細長い円柱形で弓型に曲がる。

イモカタバミ　カタバミ科

春から夏にかけ花茎を出し、淡紅色の５弁花をつける。花の中心部が濃赤紫色。根に小型のイモ状の塊茎をつける。

ウマノアシガタ　キンポウゲ科

黄色い花弁は光沢がある。葉は長い柄があり、掌状に３～５裂し、裂片はさらに浅く裂ける。

オオイヌノフグリ　オオバコ科

「フグリ」とは睾丸のことで実の形が似ていることからついた。花は直径１㎝ほどで日が当たっているときだけ開く。

オニタビラコ　キク科

高さが20㎝～１ｍになる。花は先端で多数の分枝が散房状に出る。群生していることもあるが、独立して生えていることも多い。

コラム１

カラス　スズメ　カスマグサ（ピーピーまめの種の数…）

カラスノエンドウ

カスマグサ

スズメノエンドウ

野原で見かけるエンドウで一番大きいのがカラスノエンドウです。花の色もきれいなピンク色が目立ちます。豆果の中の種子は６個～10 個入っています。小さくて白い花をつけているのがスズメノエンドウです。豆果には軟毛があり種子はふつう２個入っています。２つのエンドウの中間的な大きさでカラスのカとスズメのスをとって名付けられたのがカスマグサ。青紫色の花をつけ、種子の数はふつう４個です。

春 ~Spring~

オニノゲシ　キク科

茎は 50 ㎝～１ｍになる。葉は 15 ㎝～25 ㎝あり基部は茎を抱いている。葉先は鋭いトゲになり、さわると痛い。

オランダミミナグサ　ナデシコ科

日当たりの良い所ならどこにでも生えている。５枚の白い花はよく見ると２つに分かれ、葉や茎は毛におおわれている。

カタバミ　カタバミ科

葉が睡眠運動をし夕方になると閉じ一方が欠けて見えるのでついた名前。種は熟すと５裂し種子をはじきとばす。

キュウリグサ　ムラサキ科

ワスレナグサそっくりの薄い青紫の小さな花をつける。葉をもむとキュウリの臭いがする。

クサノオウ　ケシ科

全体に縮れた毛が多いので少し白っぽく見える。茎を切ると黄色の乳液が出る。有毒だが鎮静作用もあり、皮膚病にも効く。

コバンソウ　イネ科

黄褐色に熟した小穂の形を小判に見立てたもの。よくドライフラワーとして利用される。

コラム２

カンサイタンポポ　セイヨウタンポポ

花の下部、総苞（そうほう）と呼ばれる部分が違います。写真のようにセイヨウタンポポは総苞の外側が反り返っています。シロバナタンポポやカンサイタンポポ等日本のタンポポは反り返っていません。

また、セイヨウタンポポは受粉しなくても種ができます。種の重さも日本のタンポポの半分ぐらいで風に乗ってよく飛び、コンクリートの多い都会でもよく育ち、城陽市では真冬でも開花し綿毛を見ることがあります。

カンサイタンポポ

セイヨウタンポポ

春 ~Spring~

コメツブツメクサ　マメ科

春の道端に群生する黄色い小さな花。５～20 個が球状に集まっている。葉は３小葉からなり長さ５㎜～１㎝の倒卵形。

シャガ　アヤメ科

林内に群生することが多い常緑の多年草。伸ばした花茎を枝分かれさせて、花径５㎝くらいの淡い紫色の花をつける。

スミレ　スミレ科

日本は 50 種類以上もスミレがあるスミレ大国。花の後にツボミのまま結実する閉鎖花ができ、熟したものがはじけて飛び子孫を残す。

セイヨウカラシナ　アブラナ科

河川敷や堤防で黄色い花を咲かせ群生している。

もともと食用として導入されたものが野生化した。

タガラシ　キンポウゲ科

咬むと苦みのある事からついた名前。水田や溝などに生える。花の後、花床がのび楕円形の集合果となる。

タネツケバナ　アブラナ科

種もみを水に漬け、苗床の準備をする頃に咲く。ナズナに似た 3~4㎜の小さな花をつける。

コラム３

園芸種なの？野草なの？

ムスカリ、ハナニラ、ランタナどの花は、よく庭に植えられている園芸種ですが、街中や公園でもよく見ませんか？　見かけた草花を調べて、その名を検索してみると、結構な割合で外来種であり、人為的に持ち込まれた園芸種であるものが増えています。環境に悪影響をもたらす特定外来植物として繁茂が問題になっているオオキンケイギクも、本来は花を楽しむ園芸種として日本に入ってきました。園芸用の草花は、人が世話をしないとちゃんと育たないというイメージがありますが、野生化しにくいとは限りません。日本の風土に適合すると、在来種を蹴散らして繁殖するものも少なくないのです。

春 ~Spring~

ナガミヒナゲシ　ケシ科

オレンジ色の４弁花。果実を割ってみると中には小さな種子がたくさんはいっている。地中海原産の帰化種。

ナズナ　アブラナ科

おなじみのぺんぺん草は果実の形を三味線のバチに例えたもの。枝分かれしているものはマメグンバイナズナ。春の七草の１つ。

ナヨクサフジ　マメ科

堤防周辺ではセイヨウカラシナの後に群生している。緑肥として販売されていることも急速な広がりに拍車をかけている。

ニワゼキショウ　アヤメ科

細い柄のある直径１５ｍｍほどの６弁花をつける。花は赤紫から白色でムラサキの筋があり、基部は黄色。

ハコベ　ナデシコ科

春の七草としておなじみのハコベ。全体に柔らかく、よく分枝して群生する。ヒヨコゲサという俗称もある。

ハハコグサ　キク科

全体が綿毛におおわれ白っぽくみえる。黄色い花のかたまりがきれい。春の七草の１つ。

コラム４

オオバコ3種類

ツボミオオバコ

オオバコ

ヘラオオバコ

茎を立ち上げることがなく、短い地下茎からロゼット状に葉を広げるため、踏みつけに強くどこにでも見られたオオバコが市内の道端や公園ではあまり見なくなりました。その代わりに写真のようなツボミオオバコやヘラオオバコが目立ちます。ヨーロッパ原産のヘラオオバコは欧州では薬用とされているとのこと。軟毛のある葉の幅は狭く花穂は短いのですが、50 ㎝もの大型になります。ツボミオオバコも北米原産で空き地等に群生しているのをよく見かけます。

春 ~Spring~

ハルジオン　キク科

ヒメジョオンよりも早く４月から咲き始めるのでハルジオン。茎は中空で全体に軟毛がある。根生葉は花期にも残る。

ハルノノゲシ　キク科

葉は柔らかく基部の両側から三角状に張り出して、茎を抱く。アキノノゲシに対してハルノノゲシとよばれる。

ヒメオドリコソウ　シソ科

茎は四角形で10～25㎝の高さになる。葉は対生し網目状の脈が目立ち、上部の葉は密生し紫色を帯びる。

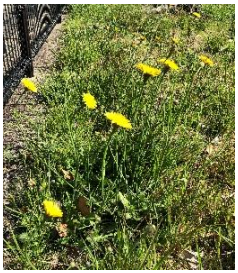
ヒメジョオン　キク科

市街地・農村・山地にもみられる。茎は粗い毛があり内部には白い髄がつまっている。根生葉は花期には枯れる。

ヒルザキツキミソウ　アカバナ科

薄いピンク色の花をつける。マツヨイグサの仲間は夕方から開花するがヒルザキツキミソウは昼間に開花している。

ブタナ　キク科



全体に剛毛があり葉は根生してロゼットを形成している。花茎を伸ばしよく分枝し、タンポポ型の頭状花をつける。

コラム５　ツクシ誰の子スギナの子―ツクシとスギナの親子な関係

ツクシの横にあるこの植物はスギナです。掘ってみると地下茎でつながっています。スギナはシダ植物なので胞子で増えます。被子植物に当てはめるとツクシは種を作る部分で、スギナは光合成をする葉の部分になります。

スギナは葉が変化した節の部分だけでなく茎の部分でも光合成をし、地下茎に蓄え増えていきます。

春 ~Spring~

ホトケノザ　シソ科

対生する葉を仏さまの蓮華座に見立ててつけた名前。唇形花をつけるが、ツボミのまま結実する閉鎖花もつける。

マツバウンラン　ゴマノハグサ科

茎は細く分枝して 50 ㎝ほどになる。基部から走出枝を伸ばし、分株をつくり道端に群生している。

ムラサキケマン　ケシ科

華（け）まんは、仏具のこと。やや湿ったところに生える。葉は２～３回羽状に細かく裂ける。紅紫色の花を総状につける。

ムラサキサギゴケ　ゴマノハグサ科

田んぼの畔など湿り気のあるところに生える。花の形が鳥のサギに似ていることから名前がついた。

ムラサキツメクサ　マメ科

牧草として渡来したものが全国的に野生化している多年草。葉は先のとがった卵型の３小葉。高さは 70 ㎝になるものもある。

ユウゲショウ　アカバナ科

茎は基部でよく分枝し、密生した群落をつくる。夏から秋にかけ草上部の葉の付け根に淡紅色の４花弁をつける。

コラム６

葉で見分けるスイバとギシギシ

葉の裏の葉脈も違いますが、分かりやすいのはスイバの葉の付け根の部分は矢じり型で茎を抱いています

実で分かるヘビイチゴとキジムシロ

よく似た花をつけるヘビイチゴとキジムシロ。赤い実をつけるのはヘビイチゴです。

茎で分かるハルジオンとヒメジョオン

花の時期が早いのはハルジオンですが茎を切ってみて中身が空洞なのがハルジオン。詰まっているのがヒメジョオンです。

夏 ~Summer~

ウマノスズクサ　ウマノスズクサ科

堤防や畑などに生えるつる性の多年草。葉の付け根にサキソフォンに似た形の花をつける。

オニユリ　ユリ科

古くから栽培されてきたものが野生化している。葉の付け根のところにムカゴという実をつける。

オモダカ　オモダカ科

水田でよく見かける多年草。花茎は 20～80 ㎝になり上部の節ごとに白い花を３個ずつ輪生する。

コマツナギ　マメ科

茎は馬をつなげるほど丈夫なことによる。葉は奇数羽状複葉。葉の付け根に総状の花序をだし、淡紫色の花を密につける。

タカサゴユリ　ユリ科

観賞用として導入され、道端や堤防の法面などでよく見かけるようになった。高さは 1m 以上になり、細い葉を密につける。

ツユクサ　ツユクサ科

３枚の花弁の内、上向きの２枚は目立つ青色であり、下向きのものは白色。短い４本のおしべはほとんど花粉を作らない。

コラム７　ワルナスビ・ショクヨウガヤツリ（驚異的な繁殖力）―耕作による拡散

ワルナスビは圃場の耕作により切断された 10 ㎝程度の根片３本を畑に埋めると２年目に 21 本、３年目には 220 本、４年目になると 923 本と、驚異的は繁殖力があり、圃場での防除が困難になります。花はナスビにそっくりですが、茎や葉、花序に鋭いトゲがあり、秋に黄色の実をつけるが食べられません。

ハマスゲにそっくりなショクヨウガヤツリも、畑を耕せば耕すほど拡がってしまい、日当たりの良い所には地下部の塊茎が一株で数百個も形成され畑全体が覆われてしまいます。除草剤にも強く、一度蔓延すると根絶が難しいです。

夏 ~Summer~

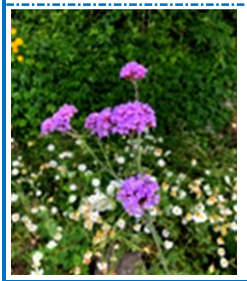
ヒルガオ　ヒルガオ科

日当たりのよい所に生えている。市内のヒルガオの仲間にはコヒルガオと２つの交雑種がみられる。

メマツヨイグサ　アカバナ科

荒れ地に生育する傾向が高いことから、アレチマツヨイグサとの名前もある。花は夕方から咲き始め、朝にはしぼむ１日花。

ヤナギハナガサ　クマツヅラ科



剛毛があってよくざらつく四角い茎はよく分枝し、高さ 1.5ｍほどになり、道端によく目立つ。園芸種として導入された。

ヤブガラシ　ブドウ科

５小葉からなる葉は巻きひげとともによく目立つ。花は目立たないが、開花すると朱色を帯びる。

ヤブカンゾウ　ススキノキ科

朱色の花は八重咲きで、堤防の法面でよく目立つ。匍匐茎を出して広がり、群落を形成する。

ワルナスビ　ナス科

茎にするどい刺があり、名前の通り、嫌われ者の帰化植物である。繁殖力に優れいったん農耕地に侵入すると根絶が難しい。

コラム１０　ジャコウアゲハとホソオチョウ（チョウの食草）

木津川の堤防は以前から、ウマノスズクサを食草にするジャコウアゲハがたくさん生息することで知られていました。独特の形をしている蛹は「オキクムシ」ともよばれ、良く知られているアゲハチョウです。ホソオチョウは、朝鮮半島から中国にすんでいて、日本につれてこられました。野外に放されたこの蝶は、弱々しく飛ぶ外見にかかわらず増え続けています。卵の数がジャコウアゲハにくらべて多く、 幼虫は、同じ食草であるウマノスズクサを食べつくしてしまいます。そのため、ジャコウアゲハの生息域はせばめられ、ホソオチョウの生息域がひろがっています。

秋 ~Autumn~

アキノノゲシ　キク科

10 月頃になると名前の通り、花が目立ち始める。花の色はクリーム色に近い薄い黄色。

アレチウリ　ウリ科

肥沃な場所で急速に成長して繁茂する。葉や茎は著しくざらつき、果実には鋭いとげがある。市内の堤防にも密生している。

アレチヌスビトハギ　マメ科

9 月頃から長さ 6 ～ 9 ㎜の美しい紫色の花を咲かせるが、果実には曲がった毛が密生している、やっかいなひっつき虫。

イヌタデ　タデ科

花弁のように見えるものは、萼(がく)であり花弁はない。萼が紅色のためつぼみの時も花が咲き終わった状態でも紅色に見える。

イタドリ　タデ科

春の新芽のころ食べるとスッパイので「すかんぽ」と呼ばれる。初秋から枝には小さな白い花がたくさんつき、翼がある種子ができる。

ガガイモ　キョウチクトウ科

乾いた所を好むつる草。花弁の先端は 5 つにわかれ、毛が多い。長い袋状の果実をつけ、種子には毛がある。

コラム8　ボロギク3兄弟 －ノボロギク、ダンドボロギク、ベニバナボロギク－

ノボロギクはヨーロッパ原産の 1 年草。明治始めに帰化し、畑などの他、道路のほとりや植栽枠の中などに普通に生育しています。真冬にも咲き、一年中見られますが、冬から春にかけて咲いているのがよくめだちます。ダンドボロギクの原産地は北アメリカ、ベニバナボロギクはアフリカの帰化植物。法面などに生育しますが、放棄耕作地などにも見られます。ともに森林の伐採後に群生し、森林域に侵入する帰化植物は珍しいです。花は 8 月の終わり頃から咲き始め、10 月ごろまで咲きます。

ノボロギク

ダンドボロギク

ベニバナボロギク

秋 ~Autumn~

カラスウリ　ウリ科

晩秋によく目立つオレンジ色の実をつける。花は夏の終わり頃開花するが、日没後に開花し夜明け前にしぼんでしまう。

キツネノマゴ　キツネノマゴ科

道端や荒地に生育し、夏から秋にかけて穂状花序（すいじょうかじょ）に７～８㎜の淡紫色の唇形花をつける。

キンミズヒキ　バラ科

細長い花序をタデ科のミズヒキにたとえた。実の上縁には長さ３㎜程度のトゲがたくさんでき、これで動物等にひっつく。

クズ　マメ科

道路沿いのマント群落の構成種。3小葉からなる葉は結構な大きさになる。根には大量のデンプンが貯蔵され、これからクズ粉を採る。

ゲンノショウコ　フウロソウ科

茎は細く、地表を這う。花は紅色と白色がある。昔から下痢止めの薬草として使われてきた。

ジュズダマ　イネ科

雄花の集まった雄花穂は緑色でやがて落ちる。実の中心には、花軸が通る穴が空いている。糸を通して数珠をつくるので、数珠玉という。

コラム１０

アンモナイトの実？

秋になるとよく道端のフェンスに巻き付いているアオツヅラフジの実。小さな花は目だちませんが小さなブドウのような実はよく見かけませんか？この実をつぶしてみると種が出てくるのですが、なんとアンモナイトの化石にそっくり！　秋の野山でする観察会ではいつもこの不思議な形の種を参加者に見せています。なぜこんな形をしているのか不思議です。

秋 ~Autumn~

セリ　セリ科

湿地や田んぼ周辺の水路などに生育し、春の七草の１つ。夏には茎が高くなって頂端に白い花を咲かせる。

センニンソウ　キンポウゲ科

花の直径は２～３㎝。４枚の花弁のように見えるものは萼で花弁はない。名前は、果実の長い毛を仙人のあごひげに例えてついたと言われる。

ツルボ　キジカクシ科

秋の初め頃から花茎を出し、総状花序をつける。花は密につき、淡い紅紫色。日当たりのよい土手や畔、海岸にも生える。

ノブドウ　ブドウ科

藪や草原に繁茂している木本のつる植物。果実は淡い紫色を経て空色になり、コバルトブルーが秋の野山を彩る。

ヒヨドリバナ　キク科

山道や草原などに広く生育する。秋の七草のフジバカマの葉は深く３列し、ヒヨドリバナの葉は対生しあらい鋸歯があることで見分けられる。

ヒレタゴボウ　アカバナ科

１ｍを超えるものもあり、秋の田んぼの畔によく目立つ、熱帯アメリカ原産の帰化植物。放棄水田に群落を形成することもある。

コラム１１　河原のつる植物　ーアレチウリ・カナムグラー

木津川も多くのダム群で水位が安定し、河原では洪水の回数が減少し、つる植物にとっては絶好の生育地となっています。秋にはガガイモ・センニンソウ・カラスウリ・スズメウリ・マルバルコウ・ヒルガオの仲間や秋の七草でもあるクズなど多くのつる植物の花を見ることができます。しかし、果実には鋭いトゲがあり、葉や茎は著しくざらつくアレチウリ、下向きの丈夫なトゲがついているカナムグラはどちらも河原で大群落を作っています。繁殖力が強くなかなか除去できない、これらのつる植物は在来種の脅威となっています。

秋 ~Autumn~

ヘクソカズラ　アカネ科

花の外側は白色で、中心部と筒の内側は紫紅色。花筒の外側には微細な毛が密生。夏に葉を揉むと独特の臭気がする。

ベニバナボロギク　キク科

頭花は下向きにつく。アフリカ原産の帰化植物で、湿った畑や溝のわきなどによく見かける。伐採した森林跡や山林火災後に群生する。

ママコノシリヌグイ　タデ科

林縁などに成育する。葉の裏や茎に鋭い棘があり、触るととても痛い。ミゾソバそっくりの淡い紅紫色をつける。

マルバルコウ　ヒルガオ科

花は赤みを帯びたオレンジ色の花。道路横の草地、放棄畑、河原などに生育している。放棄畑を覆い尽くすこともある。

ミゾソバ　タデ科

小川や用水路などに群生していることが多い。葉の形が牛の顔に似ているから「うしのひたい」とも呼ばれる。

ヨメナ　キク科

よく似たノコンギクは葉や茎に短毛が生えざらつくが、ヨメナの葉は無毛で少し光沢がある。

コラム12　布袋さんそっくり！ カラスウリの種

カラスウリは花弁の縁が糸状に長くのびる花を咲かせますが、翌朝にはしおれてしまうので目にする人は少ないと思います。月の光の下でよく目立つこの花は花粉を媒介してくれる蛾の目印になるそうです。

雄株と雌株があり、秋になると雌株はオレンジ色の卵型の実をつけます。実の中に入っている種はよく見ると、大きな耳を持った七福神の布袋さんにそっくり。大黒様に似ているということだけじゃなくて、その後に金色に変化するから「金運に良い」とされて財布に入れるとよいとも言われています。

ドングリころころ ドングリいろいろ

- ブナ科
  - コナラ属
    - アラカシ・シラカシ・イチイガシ・ツクバネガシ・アカガシ・ウラジロガシ・オキナワウラジロガシ・ウバメガシ（→常緑樹）
    - クヌギ・アベマキ・カシワ・ミズナラ・ナラガシワ・コナラ（→落葉樹）
  - シイ属
    - スダジイ・ツブラジイ・オキナワジイ（→常緑樹）
  - マテバシイ属
    - マテバシイ・シリブカガシ（→常緑樹）
  - ブナ属
    - ブナ・イヌブナ（→落葉樹）
  - クリ属

■ドングリは、かたい皮で覆われた種子をもつブナ科植物の果実(堅果)の総称です。
■クヌギ・マテバシイ・ウバメガシ・シイはドングリが実るまでに２年かかります。
■拾ってきたドングリから白い虫が出てきたことがありませんか？これはシギゾウムシやハイイロチョッキリの幼虫です。こうした昆虫以外にもドングリは、いろんな生き物が利用しています。
■ドングリには落ちる順番があり、京都の南部では、クヌギ→コナラ→カシ類→シイ類の順に落下します。
■ナラ類・カシ類はタンニンをたくさん含み、えぐくて生で食べられませんが、スダジイやマテバシイは生でも食べられます。

ドングリクイズに挑戦!!

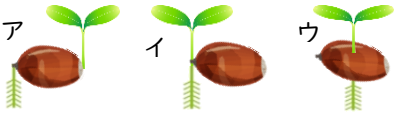
①ドングリってなに？

ア.木の実(果実)
イ.木の種

②この部分の名前は？

ア.ぼうし
イ.パンツ
ウ.かくと

③芽生えたときのようすは？



④ドングリの種類はいくつ？

ア.１種類
イ.１２種類
ウ.２２種類

⑤ドングリはそのままで食べられるか

ア.食べられる
イ.食べられない
ウ.食べられるものがある

⑥笛にできるドングリの名前はなに？

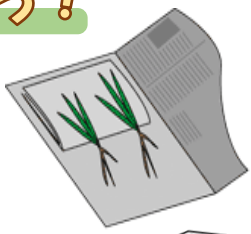
ア.クヌギ
イ.コナラ
ウ.マテバシイ

こたえ　①ア　②ウ(殻斗)　③イ　④ウ　⑤ウ　⑥ウ(クヌギストロブラックにくらべるとタ外皮が分厚い)

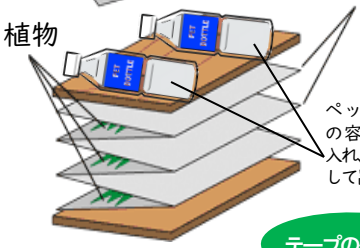
植物標本を作ってみよう！

1 採集の仕方

・植物全体の形がよくわかるようにとり、新聞紙を４つ折りしたものに植物をはさみます(標本として完成した状態を予想してはさみます)。
・花や果実、胞子などがついているものを選んで採集します。木の場合は、枝先 40cm ぐらいを切りとります。草は、小さなものは根までほり、大きいものは、折り曲げるか、枝先 40cm ぐらいで切り取ります。
・シダの場合は、地面の生えぎわで１、２枚切ります。

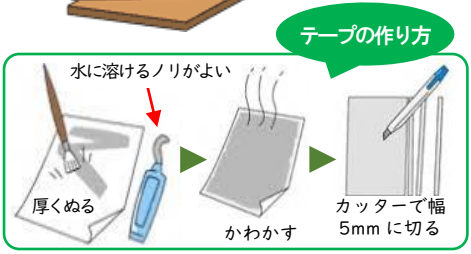


すいとり紙(新聞紙)はなるべくたくさんの新聞紙をはさんだほうが早く乾いて良い標本ができる。



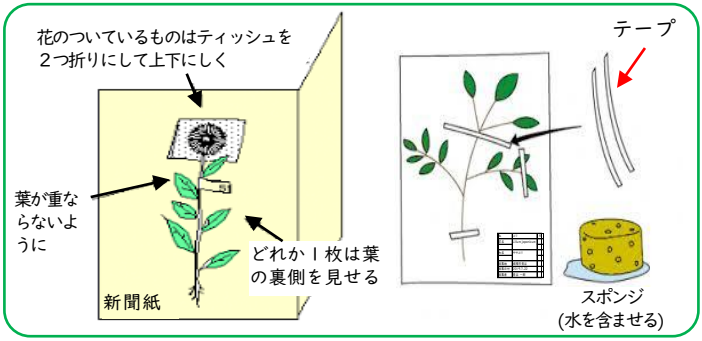
2 植物の乾かし方

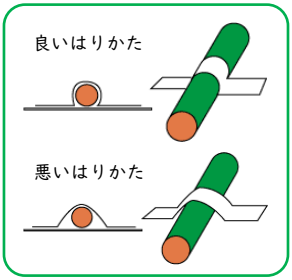
(1) 形をととのえて新聞紙にはさむ。
(2) 吸水用新聞紙(すいとり紙)を重ねる。
(3) (1)と(2)とを繰り返す。
(4) 上下に板を置いておもりをのせる(10kg ぐらい)。
(5) 吸水用新聞紙(はさみ紙)を毎日取りかえる。



3 標本の作り方

(1) テープを作ります。
　ノリはアラビアゴムノリが一番よいのですが、扱っているお店が少ないので、チューブ入りの合成ノリでもかまいません。
(2) 台紙に標本をはりつけます。
　台紙に乾いた標本を形よく置いて、(1)で作ったテープではりつけていきます。台紙は A3 サイズのケント紙か八つ切りサイズの画用紙(A3(420×297) 八つ切り(382×271))でもかまいません。テープは切手を貼るときのようにノリのついている面を水を含んだスポンジなどでぬらして使います。貼りつける間隔は 15cm ぐらいにします。





4 ラベルをつくる

　ラベルには、採集した場所とその年月日、採集した人、標本の名前などを記入します。ラベルは必ず台紙の右下にはります。

No.	ユリ	科
学名	Lilium japonicum	
和名	ササユリ	
採集地	城陽市青谷	
採集日付	2019.7.22	
採集者	青谷 一郎	

(ラベルの作成例)

5 整理・保管

　保管は、ナイロン袋の中に標本と虫よけのナフタリンなどを入れ、適当な大きさの箱に入れて整理します。

「城陽市の花」ハナショウブって？

アヤメの仲間（アヤメ科アヤメ属）は、世界で200種類が知られており、自生種（じせいしゅ）から園芸化（えんげいか）されたものも多く、その代表は城陽市で栽培されているノハナショウブを改良したハナショウブです。

城陽のハナショウブは、明治 40 年頃から作られ始めたといわれており、安永年間に作られ始めた青谷の梅や享保年間に導入されたサツマイモと並んで城陽を代表する歴史の古い産物です。豊富で良質な地下水を使って栽培しているのが大きな特徴です。

「いずれがアヤメかカキツバタ」という言葉があるように、見分け方がむずかしいアヤメ、カキツバタ、ノハナショウブ、ハナショウブですが、見分け方は花びらのもとのところを見ればわかります。

アヤメ

場所　やや乾いた草地に生える。
開花　5月上中旬。
花　外花被片に黄色の網状の模様がある。

カキツバタ

場所　アヤメの仲間では最も水湿を好み、水辺に生える。
開花　5月中下旬。
花　外花被片に白い斑紋がある。

ノハナショウブ

場所　湿地や草地に生える。
開花　6月から７月。
花　花は赤紫で、外花被片に淡黄色の斑紋がある。ハナショウブの原種

ハナショウブ

場所　湿地や草地に生える。
開花　5月下旬から6月。
花　園芸種の花は紫、白など。外花被片に淡黄色の斑紋がある。

製作協力：宇治市植物公園　園長　魚住智子氏
製作・発行：城陽環境パートナーシップ会議

※本書の内容について無断転載・複製を禁じます。